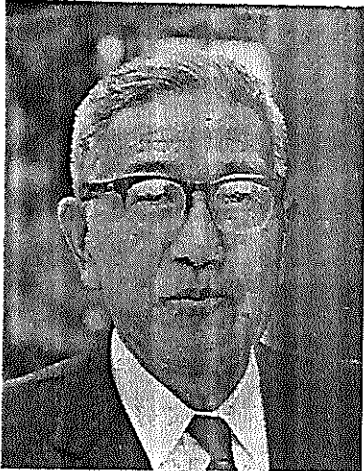


..... は し が き



日本白鳥の会会長

家 田 三 郎

本田事務局長より「はしがき」を書いてくれとの電話があったとき、このわれわれの会が何年になるのかと思った。昭和48年6月に創立の会があり、「日本の白鳥」という会報が今度で8号になる。事務局といっても局長一人だけの歳月だったことを思った。野生生物のことはもちろん、白鳥のことを全く知らぬ私がこの会の責任者にさせていただいたのは、本田事務局長とのところ近さの相談相手にということだった。

白鳥と本田氏とローゼ夫人との偶然性、それがスリムブリッジのIWRBの会、白鳥会議への水原、吉川氏招待への偶然、そして、ローゼ夫人、本田氏、吉川氏の参加、更には元水原町長佐藤氏のスリムブリッジ訪問、ここで佐藤氏は儀礼としての日本への招待の発言、そして北海道と松井氏の計画、それが八年前の日本白鳥の会創立へと結びついていく。当初、それは日本の各地の白鳥に関係される人々が集い、語り合う集会ということだったが、その第一の希望は、世界中の白鳥関係者の集いを日本でやりたいということだった。

日本野鳥の会、日本鳥類保護連盟・WWF日本委員会の皆さん、文化庁の堀内氏、さらには農林省の阿部氏、日本各地の人々、中でも北海道と松井氏の歳月を思う。日本にもIWRBの支部が出来、遂に北海道においてIWRBの会議が催され、世界の白鳥関係者の会合が開かれた。それは、われわれの会の目的の一つが達成されたということであった。そして、そこに当然のこととしてエコロジーの問題とか環境に対する問題が、山のようにあるという事実が理解されはじめてきたということである。私のようなはしくれの相談役などということは、けしとんでしまった。

今年は幸福にも改選の時である。新しい役員によって、白鳥のいる地球、さらには宇宙と取り組まねばならぬ宿命、お叱りを覚悟の上でかく申し上げ、深く祈るしかない。